

# 狡兎良狗の帝国

—— オスマン期カイロの街路における暴力と愛情 ——

アラン・ミハイル

(上野雅由樹 訳)

## 訳者解題

本稿は、Alan Mikhail, “A Dog-Eat-Dog Empire: Violence and Affection on the Streets of Ottoman Cairo,” *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 35, no. 1 (2015): 76-95 の和訳である<sup>1)</sup>。イェール大学教授の著者ミハイル氏は、オスマン帝国史分野における環境史研究の第一人者であり、エジプトを主な対象地域としてこれまで精力的に研究成果を発表してきた。ミハイル氏が扱うテーマは、ナイル川の灌漑や木材と穀物の流通、気候変動や疫病の影響、そして人間と動物の関わりなど多岐にわたる。人間と動物の関わりに関して著者は、オクスフォード大学出版会から2014年に著書、*The Animal in Ottoman Egypt* を刊行しており、そのなかでも人間と犬の関係を絞ったのが今回取り上げた論文である。

本論文の意義は、第一に、人間と動物の関係の変化という独自の視点から近世から近代への移行が持つ意味を論じた点にある。世界的に見て、近世から近代への以降、そしてその後の歴史は、(愛玩動物という人間と動物の新たな関係性を生み出しつつ)人間の生活空間から動物を排除する傾向を有する。著者はこうした過程がなぜ、どのように生じたのかをエジプトの中心都市カイロの事例を通じて描く。本論文の第二の意義は、こうした変化を論ずるにあたって犬に注目した点である。現代において犬は、イスラームの観点から常に不浄な動物と見なされてきたと理解されがちであるが、著者は歴史学の立場から、ムスリムと犬の関わりを明らかにすることでこうした見方に疑問を呈し、その近代の産物としての側面を指摘している。

## はじめに

18世紀から19世紀への転換期に、エジプトにおける

i. Copyright, 2015, Duke University Press. All rights reserved. Republished by permission of the copyright holder, Duke University Press. www.dukeupress.edu

原註は稿末脚注とし、訳註は脚注とした。括弧を用いた原文中の補足は丸括弧で、訳者による補足は角括弧で表現した。

人と犬の関係はそれまでの千年間とは比べるまでもないほど変化した。両者の関係の変化は、1770年から1830年のあいだのエジプトで、政治、経済、社会の面で統治の性質に生じたとてつもない変容の産物だった。この時期に、非常に強力な国家機構が社会を再編すべく現れたのである。こうした再編は、どのように人と動物がお互いに、そして国家と関係しあうかに永続的な変化をもたらした。18世紀末期に少数の地方名望家が土地やそれ以外の資本を大量に集積すると、それは商業化と中央集権化の引き金となり、こうした過程は最終的に、カイロにおいて過去何百年と比べても最も強力な政府が登場することにつながった<sup>1)</sup>。それに続く時期にこうした政府は、[社会への統制を強化するための]様々な拡大戦争に乗り出す。そしてついには学校、省庁、病院、軍事学校やそれ以外の国営施設を設立し、道路、橋梁、運河などのインフラ設備を建設したのである<sup>2)</sup>。さらに1780年から1820年のあいだには、エジプトの二大都市、カイロとアレクサンドリアの人口は急増した<sup>3)</sup>。この、世界的な革命の時代に生じた政治変動や、自給から商品経済への移行、官僚制化や都市化といった過程は、エジプトや中東、世界の歴史家たちが長らく研究してきたものである。これに対し、こうした世界的変容のなかでも注意深く分析されてこなかった側面のひとつとして、そうした変容が最も重要な歴史的関係性のひとつに、すなわち人類と他の動物との関係に及ぼした影響があげられる。

本稿は、世界的に見られたこれらの過程がオスマン期のカイロで人と犬との関係にどのような影響を及ぼしたのかを解明する。エジプトにおいて犬は、人間以外では最も重要な存在のひとつだった。犬はたいていのばあい、人間社会において有意義な種と見なされていた<sup>4)</sup>。犬は家畜の番をし、しょっちゅう狩猟に参加し、主人を防衛し、忠誠と信頼の典型を示し、戦争で戦い、そしておそらく最も重要なこととして、都市と農村のごみの生きた消費者だった。それゆえオスマン期のエジプトにおいて犬は、他の場所においてと同様、経済的にも社会的にも、文化的にも環境的にも人間社会に多くをもたらした<sup>5)</sup>。オスマン役人はじっさい、食べ物や水を与えたり、犬に暴力を振るう者を罰するなどして犬の数を増やし、維持することを積極的に奨励したのである。

オスマン期エジプトでその他諸々がそうだったように、

18世紀から19世紀への転換期にこうした関係は劇的に変化した。19世紀初頭に犬はもはや、社会にとって有意義で有益な存在とは見なされなくなった。犬はまず、騒音の源や都市空間をめぐる競合者、潜在的な病気の媒介者、無益な汚物の源と見られるようになった。そしてだんだんと、経済的には取るに足らない存在、ついには文化的にも無視してよい存在と見なされるようになった。これらの、そしてそれ以外の経済的、人口的、疫学的理由のために、19世紀初頭に犬はいよいよ犠牲にしよう存在になり、最終的には撲滅運動の標的になった。それゆえ犬について語ることは、18世紀から19世紀への転換期における、病気と健康という観念の変容や、都市の衛生と政治の改革、そして、オスマン期のエジプトにおいて見られた、種族間の暴力を強いる国家権力の成長を説明するのに役立つのである。

犬について語ることは、人と犬の関係の歴史のなかで矛盾のように見えるものを探ることも可能にしてくれる。社会から暴力的に消し去られようとしたまさにその時代に、犬は伴侶動物として愛情をもって受け入れられるようになったのである。犬をペットとして飼う現象がエジプトで十全たる形をとるのは20世紀初頭のことなのだが、後述するように、ここで検討する19世紀初頭の過程は、人と犬のあいだのこうした新たな関係の萌芽だった。オスマン期カイロにおける人と犬の関係の変化は、18世紀から19世紀への転換期にエジプトを形づくった壮大な変容の歴史的一幕なのであり、それはまた、種族間に見られた暴力と愛情の歴史なのである。

## ハディースと犬

オスマン期カイロの犬の歴史を理解するにはまず、近世エジプトの犬に対する見方を特徴づける概念上の基盤をいくらか理解せねばならない。じっさい、近世には犬と人のあいだに相互の信頼と生産性に基づいた有益な関係の歴史が見られたのだが、それは何百年もかけてイスラム社会で培われた犬に対する見方の産物だった。イスラムの思想と文化における犬についての古典的な宗教的・法学的文献の多くは、この動物の唾液の問題を扱っている<sup>6)</sup>。この議論の出所はハディース<sup>ii)</sup>であり、犬が器をなめた後は容器を何度か洗う必要があることが述べられ、なかには砂塵で浄めることを述べるものもある。このハディースには様々な説があり、それによって1回、3回、5回、あるいは7回と容器を異なる回数洗うことが命じられ、砂塵を用いることを指示することもあれば、そうでないこともある。あるハディースでは、犬がある

者の衣服に触れた際、しめらなかつた場合は衣服を力強く擦り、犬が衣服を湿らせた場合は清らかな水で洗うべきことが述べられている<sup>7)</sup>。別のハディースは、預言者は犬が寝そべったところはどこであれ洗浄するよう命じたと主張しており、それは犬の唾液が地面に垂れたり、犬が口を置いたところに唾液が残されたりすることを恐れてだった。要するに、犬の唾液は不浄であり、ムスリムの儀礼の清浄さを失わせると考えられたのである<sup>8)</sup>。ハディースに見られる犬の唾液への執着は、クルアーンそのものに先例がある。「彼〔不信仰者〕の譬えはまるで犬の譬えで、もしおまえが彼を叱り付ければ舌を垂らし、また、放っておいても舌を垂らす<sup>9)</sup>」。

犬の唾液について書かれた多くの注釈は、犬が触れた器の洗浄を要求する権威あるハディースへの服従を、この動物とその唾液を不浄とする判断の主な根拠としてあげている。豚と同様、どんな反証があつたとしても、犬は不浄とされるべきなのである<sup>10)</sup>。しかしながら、この見解には多くの法学者が異を唱えた。多くのマールク派<sup>iii)</sup>法学者は、実際の経験、あるいは書かれた伝統の権威を通じてそうでないと証明されない限り、自然界のあらゆるものは清浄と見なされるべきとの前提から始める。そしてこうした法学者は、犬は不浄であるという定まった立場に反論し、自然が清浄であるという想定に合うように相手の権威に疑問を呈するべく、参照された典拠の信頼性と真正性を攻撃した。別の方針をとる著述家もおり、彼らは、犬がなめた器を洗浄せよとの命令は信徒共同体に疫病が蔓延するのを防ぐことを目的としていたと仮定した。彼らは、器が洗浄されねばならないのは、なめた犬が病気に感染していると知られていることが確定できる場合のみだと論じた<sup>11)</sup>。感染の証拠がないのであれば、犬が清浄であることは前提とされ、受け入れられねばならないのである。別の法学者たちは、農村と都市の犬の唾液を区別し、人間などが出すごみを消費する後者のみが不浄であると主張した。同様の論理を用いて、飼われている犬は餌や住処、手入れ、世話を提供してくれる主人のおかげで清浄なのであり、不浄なのは野生の犬や野良犬であると論ずる者たちもいた。犬の唾液が不浄であるという考えに賛成するにせよ反対するにせよ、これらの議論は、この問題についての宗教的、法的、文化的思索の深さと複雑さを反映しており、さらに犬が、関与と文化的理解を必要とする人間社会の一員として存在してきたことも示している。

犬と儀礼的な清浄さに関して類似した、しかしあまり議論されていない問題は、礼拝の最中に犬を見ただけでそれが無効になるかどうかというものである<sup>12)</sup>。こうした考えは、ロバや豚などの動物や女性、ときには非ムス

ii. 預言者ムハンマドの言行に関する伝承。

iii. スンナ派イスラムの主要な法学派のひとつ。

リムが礼拝中の清い（男性）ムスリムの前を横切った場合、彼の礼拝が無効になることを主張する、より大きな伝統の一部である。犬の唾液に関してと同様、この考えに対しても懐疑的な見方が存在する。ハディースのなかには明白に、預言者自身が近くで犬が飛び回っているときに礼拝を行ったと主張するものもある<sup>13)</sup>。概して預言者とその教友<sup>iv)</sup>たちは、犬に対してかなり肯定的な見方をしていたようである<sup>14)</sup>。じっさい、ほかならぬ預言者の妻アーイシャほどの権威が、犬と女性が礼拝を無効にするという考えに疑問を呈しており、犬と女性を関連づけることは後者にとって屈辱的であり、預言者の教えにも行動にも基づいていないと主張しているのである。（動物と女性の関連性という）ハディースの構成要件が疑わしいことを考慮し、法学者は、ハディース全体が真性ではないと判断し、犬や女性、豚などを見るのが礼拝を無効にするという考えを否定している。創造物のなかの「問題ある」様々な部類を同等と見なすのは、現代の法学研究者ハーレド・アボルファズルが「社会の周縁的な要素のあいだの象徴的関連性」と呼ぶものである。彼は、初期イスラームの法学者たちが犬の問題についてためらったのは、人類と動物を弁別する境界を探求しようとする前近代社会の試みにおいて、犬に関する言説が象徴的な役割を果たしたことによると説明している。この意味で、犬に関する議論は犬の性質だけでなく、人類の性質も取り決める場として機能したのである<sup>15)</sup>。こうしたより広い視野に立てば、犬に関する見解の規則性も、その幅広い食い違いも、人類と神の創造物の性質に関するイスラーム思想内の、そしてそれを超えた長い議論のなかの一要素と見ることができる。これらムスリムの著述家にとって、犬はそれ自体が目的ではなく、こうした論争の一部の媒介者なのである。

それゆえ、イスラームの権威ある古典文献で犬をはっきりと不浄、役立たず、危険だとするものはきわめて少ない。逆に、この動物とのずっとあからさまな関係を示す証拠はかなり存在する。犬がいるなかで預言者自身が礼拝したことに関するハディース以外には、預言者の徒弟や教友の何人かが子犬を飼い、育てたとするハディースもある<sup>16)</sup>。犬はマディーナ<sup>v)</sup>で自由にぶらついてたことが知られており、預言者モスクのなかにさえいたことが伝えられている。ある娼婦（別の説では老女、あるいは罪人）は、砂漠で喉が渇いて死にかけている犬に水を与えたことで天国に場所を得た<sup>17)</sup>。住処の「入り口に両前足を伸ばし」、「洞窟の仲間たち」を守ろうとした犬も、同様に天国に居場所を得たのである<sup>18)</sup>。この説

話のクルアーン版のみが犬に言及しており、キリスト教版には言及がない。犬の重要性を証明することとして、イスラーム学ではこの犬の名前に関する議論さえ存在する<sup>19)</sup>。名前があったかどうかはともかく、この犬はしゃべることができ、彼が「洞窟の仲間たち」の精神的な指導者であると主張する者もいれば、人間の生まれ変わりだと主張する者もあった<sup>20)</sup>。イスラーム学の別の伝統では、負傷に対する犬の我慢強さは軍事的、政治的指導者が見習うべき望ましい特性なのだとされる<sup>21)</sup>。

ハディースや、イスラームの法的、宗教的著作物の集成のなかの他の文書が犬に言及していることはまったく驚くようなことではない。この動物は、これら思想家たちが執筆に動んだ世界のあちこちにいた。おそらく一部のの人たちにとって驚きなのは、犬が清浄なのか不浄なのかという問いに対しては決定的な回答が存在せず、じっさい、ムスリムによって、またムスリムのために、この動物に対してははっきりと数多くの支持が表明されていることなのである<sup>22)</sup>。

## 良い犬

ムスリム世界では何百年ものあいだに犬についての考えに様々な展開があっただろうが、それに先行するハディースは、近世オスマン期のエジプトにおける人と犬の知的・文化的相互作用にとって中心に位置し、決定的に重要であり続けた<sup>23)</sup>。犬についてのこうした初期の理解と関わる二種類の史料群からは、18世紀末までのオスマン期エジプト社会にとって犬がいかに大切な一員であったかが浮かび上がってくる。第一に、犬の宗教的、寓意的、法的処遇であり、そして第二に、犬と人の相互作用に関する社会史的な記録である。

オスマン期エジプトで最も支持された犬擁護論の一つは、16世紀中葉から17世紀中葉のカイロで執筆に携わったウラマー<sup>vi)</sup>によるものである。ヌールッディーン・アブー・イルシャード・アリー・イブン・ムハンマド・ザイヌッアビディーン・イブン・アブドゥッラフマーン・アジュフーリーは、カイロ北方のカルユービーヤ県アジュフル村で1560年に生まれた<sup>24)</sup>。彼はマールク派の法学者であり、カイロのアズハル学院で知的経歴のほとんどを過ごすなか、コーヒー飲用やタバコの許容可能性など、様々な法的テーマについて執筆した<sup>25)</sup>。人生の最終盤には怒った学生に頭を重い本で殴られて視力を失った<sup>26)</sup>。1656年に死去している。犬が概して容認できる存在であり、儀礼上清浄であることについての彼の見解と記述は、異なる法学派のあいだでの仮定上の議

iv. ムハンマドと直に接した、第一世代のムスリム。

v. 622年の移住後、ムハンマドが居を置き、信徒共同体を打ち立てたアラビア半島の都市で、マッカにつぐ聖地とされる。

vi. イスラーム諸学を修めた知識人。



論として書かれた文章として残っている<sup>27)</sup>。名前の挙げられていない、もしかすると架空の存在かもしれないシャーフィー派<sup>vii)</sup>のウラマーの立場に対し、アジュフリーは自身のマーク派の伝統を代表している。議論は8つの争点からなる。8つの各節で、アジュフリーはまず犬が清浄であり、社会において有意義な存在である理由を提示する。次に彼の意見に対し、儀礼上の犬の不浄性という立場を擁護するシャーフィー派のウラマーが反論する。その後、アジュフリーは、彼の最初の論点に対する批判に応じるのである<sup>28)</sup>。議論の一部分では、犬の清浄さに関する古典的な議論（その最たるものが唾液の問題である）のいくつかが再考される。しかしながら、先行する議論とはまったく対照的なことに、犬の不浄さを唱える立場はもはや異論に耐えることができない。アジュフリーが示しているように、エジプトでは17世紀までに人と犬の関係に関する考えに展開が見られ、犬の不浄さは議論の分かれる問題になったのである。

例えばアジュフリーは、犬がマディーナの預言者モスクに入り、会衆によって大切にされたことについて書く<sup>29)</sup>。絨毯が敷かれたモスクの床に鼻面を置き、聖なる場所に唾液を残したにもかかわらず、犬が神聖な空間から追い出されたわけでもなければ、その場所が何らかの特別な方法で洗浄されたことを示すものは何もないのである。じっさい、アジュフリーが書いているように、預言者自身は犬がモスクにとどまることを許しており、その存在や唾液によって煩わされることもなかったようである<sup>30)</sup>。アジュフリーの対話者は、おそらく問題の犬の口は乾燥しており、したがってモスクの床に湿気を残さなかったのではと、いくぶん薄弱な反論を提示する<sup>31)</sup>。アジュフリーはすぐさま、ハーハーとよだれをたらす犬の性質を考えればとてもありそうにないことだと反論する<sup>32)</sup>。より重要なことに、犬のしめった口について何の特定な言及もないのだから、犬の唾液は認められた性質の問題のない一部として受け入れられており、不浄と見なされていないと想定されねばならないとアジュフリーは付け加えるのである<sup>33)</sup>。シャーフィー派の論争相手がアジュフリーに示した弱々しい批判とマーク派の力強い反論は、近世までには犬に対するこうした議論に嫌気がさしてきていたこと、そして犬とその唾液の清浄さを支持する立場が優勢になったことを示唆している。

アジュフリーは、こうしたテーマに関する長引く疑問を打ち消し、「犬の唾液の、儀礼上の清浄さ」を考慮すれば、狩猟の際に犬が口にくわえて集めてきた動物を人間が消費することに不浄さの危険性は存在しないと記す<sup>34)</sup>。こうした見方は、シャーフィー派のウラマー

のなかにさえも認める者がいる以前からの考えを受け継いでいる。すなわち、犬が儀礼上不浄だとしても、神は、暮らしに犬を必要とする人間の獵師のために特別な施しとして犬の唾液を清浄にしたというものである<sup>35)</sup>。犬の清浄さの最後の例として、アジュフリーは、土から水分を搾り取ろうと湿った土を食べていた、どうしようもなく渇きを覚えた犬にある日、出くわした男についてのハディースを引用する<sup>36)</sup>。犬のことを哀れんだ男は靴を脱ぎ、それを使って近くの井戸から水を汲んで渇きが癒えるまで犬に飲ませた。こうした善行の報いとして、神は男に天国に入ることを許したと言われている。シャーフィー派はこのハディースに対し、男はおそらくまず水を靴から器に注ぎ、その器から犬に水を与えたのであり、それによって靴の清浄さを犬の唾液から守り、維持したのだらうと主張する<sup>37)</sup>。こうした異議に対するアジュフリーの主張は、もしそうした容器が手に入るのであれば、そもそもそれに井戸から水を汲んで犬に直接与えたに違いなく、靴を中継の容器として使わなかったという至極単純なものである<sup>38)</sup>。言いかえれば、第一に、男の靴は手に入るなかではわずかながらも適切な唯一の容器だったのであり、そして第二に、最も重要なこととして、犬の唾液が男の靴に、そしてどうやら男の足に触れることに法的な異論はないと想定しなければならないということである。

若いころ田舎にいたときも大人としてカイロにいたあいだも、アジュフリーは彼の周囲で頻繁に犬を見ることになり慣れ親しんでいただろう。彼は、宗教法の訓練と専門知識を通じて犬についての文筆に取り組んだが、犬についての彼の意見は近世エジプトの人々と犬とのとても密接な関係から導き出されたし、形づくられていた。犬は、オスマン諸州のなかでも最も豊穡なこの州のいたるところにおり、その多くの社会的役割が、オスマン期エジプトの文化的、政治的、環境的、経済的、そしてアジュフリーが示すように、法的な歴史に深く影響していた。宗教的、法的文献から年代記やその他の叙述史料、文書史料に目を移せば、犬の歴史的経験と社会史を通じて、人間社会における犬の、本質的で有意義な経済的、社会的役割がさらに見えてくる。

どの記述を見ても、16、17、18世紀のカイロは犬だらけの都市だった。オランダ南部出身のフランシスコ会レコレ派のアントニウス・ゴンザレスは、1665年と1666年にカイロのフランス領事付司祭を務めたのだが、彼は、この都市には数え切れないほどの犬がいると書いた<sup>39)</sup>。まさにカイロのあらゆる通りで飼い主のいない犬の大群がごみやくずを食べて暮らしており、犬は都市を清潔に保つことで公衆の衛生と秩序に重要な貢献をなしていた<sup>40)</sup>。じっさい、カイロの犬はあまりに多く、20、30匹の群れが人々の後に続いて歩いて行くのを目にするの

vii. スンナ派イスラームの主要な法学派のひとつ。

もまれなことではなかった<sup>41)</sup>。朝、扉を開けたときから夜に閉じるまで、人々は野良犬が家のなかに入らないようにいつも戦わねばならなかった。こうした数多くの犬は、都市の慌ただしい場で出くわすだけの存在ではなく、むしろ路地にごみがないようにするためにオスマン当局に支えられ、戦略的に維持され、注意深く養われた集団だった<sup>42)</sup>。厳格な規則により、こうした動物の殺生は違法とされており、犬に対する暴力や殺生（猫のばあいも）で有罪とされた者はだれであれ厳しく罰せられた<sup>43)</sup>。犬を害する者へのこうした積極的な処罰は、老人や身体に障害を抱える者に暴力をふるった者に対する非難に準えられたのであり、この点でも、犬と、人間の社会的、身体的弱者とのあいだに類似点が見出されていたのである<sup>44)</sup>。

カイロの犬たちを助け、守り、維持するために、この都市には様々な制度が存在した<sup>45)</sup>。都市のいたるところには、犬に日々の糧を提供するためにえさ箱と水おけが置かれた<sup>46)</sup>。モスクではしばしば犬に餌がやられ、その多くは入口のところに犬やラバなどのために石造りの大きな水盤を保持していた<sup>47)</sup>。肉屋や魚屋など様々な業種の店主は、清掃の担い手や見張り、様々な手助けとして犬を利用していた<sup>48)</sup>。そのうえ犬は、ネズミやウサギ、イノシシのような望まれない害獣を都市から遠ざけていた<sup>49)</sup>。

カイロの野良犬たちにとって日々の糧の源として最も重要だったのは、オスマン当局が提供する食べ物や水でもなければあちこちに彼らがいた街路で見つけることができた食べ残しでもなく、都市の数多くのごみ山だった。カイロはごみ山で有名であり、じっさい、カイロにはごみ山とそれが養っていた犬があまりに多く、世界中の都市にとってひとつの参照点とされるほどだった。例えば、19世紀中葉に中国を訪れた際、イギリス人旅行者のジョージ・フレミングは、何年も前にカイロで見たものを思い出したのだった。

インドのパリア犬、カイロ、そして広くはエジプトのどう猛な害獣、シリアでのそれら、イスタンブルの狭い街路で月明かりのもと、たびたび石を投げつけなければならなかったうなる群れとまったく同類なのである。中国北部のパリア犬は、彼らと同様、邪魔されることなく町や村で繁殖し、はびこり、平地や野原で日中に集まったり、墓地に住み着くことが許されている。夜中には我が国のくず拾いのように街路をうろつき、通りにちらばった大量の汚物やごみを一掃するのである<sup>50)</sup>。

このように、カイロの犬は、オスマン帝国の他の都市の犬とともに、世界の他の地域にとって野良犬の典型とさ

れたのである<sup>51)</sup>。

これら犬たちが食べ物を得たごみ山はたいてい、西方のナイル川からカイロの街外れに近づいたときに訪問者が最初に目にする光景であり、訪問者が遠くから都市を眺めることができる、小高く見晴らしのよい場所としても役立った<sup>52)</sup>。城壁外のこうした土手は、都市の住民たちが何百年ものあいだ城壁の外の視界外へのごみを投げ捨てて処分してきた結果だった<sup>53)</sup>。こうして長年にわたって、「都市の周囲を実質的には囲ってしまっていた、ほぼ途切れることのない帯状の高い土手」が積み上がったのだった<sup>54)</sup>。こうした土手は、市壁を補強して守備的な機能も果たすまでになり、都市の守備にあたって利用可能な最も高い見張り場のいくつかを占めてもいた。例えば、フランスによる占領期にナポレオンの兵士たちは、都市の回り全体に監視塔や守備用の陣地をつくるのに、こうした土手が提供する高みを利用した<sup>55)</sup>。カイロの犬にとって、都市の土手はとりわけ魅惑的だった。犬たちは、消費可能ないいものが見つからないかのごみをくまなく探し、そうでないものは放っておいた<sup>56)</sup>。市壁内の土手は外部のものほど強い印象を与えなかったが、それでもカイロを訪れたあらゆる人々の目を引いた。市壁内の土手が市壁外のものよりずっと小さかったのは何よりも、都市の犬たちが市壁内の土手を食い止めるのに役だったからだった。長年にわたって犬たちは、一番新鮮で最良の食べ残しなどのごみは市内で得られることを学んでいたのであり、市壁内の選りすぐりのご馳走をめぐってカイロの野良犬のあいだでは激しい競争があった<sup>57)</sup>。

このように犬は、オスマン期カイロの都市構造において不可欠な行為主体だった。犬は、有用な社会的、経済的機能を数多く果たしたのであり、この都市にやってきた誰もがその数の多さを指摘した。カイロの人々と犬のあいだで日々の有益な相互作用が見られたことは、この動物に対するたいへん肯定的な見解がこの時代の宗教的、歴史的、文学的著作物に大いに注ぎ込まれることを意味した。17世紀末に書かれたある著作が例証しているように、犬についての伝統的な作品の特徴のいくつかは、近世にはエジプトの人々の経験と犬と人に関する理解を通じて有益に矯正されたのである。

男が靴で喉を渴かせた犬に水をやるといったような以前の説話とは異なり、17世紀末には人と動物の関係が逆転し、貧しく、空腹な男に糧を与えるのは犬だった。かつて裕福だった男は一連の借金に打ちのめされ、財産をなくし、一文無しになった<sup>58)</sup>。失った富を少しは取り戻せないかと、男は家族を置いて新たな富を求めて旅に出た。最終的に彼は、多くの富裕な商人がおり、土地がありそうな、ある町の外れにたどり着いた。彼は町へと進んでいく前に、休むために少し腰を下ろした。まも

なく、金色の襟のついた飾り立てた絹と金襴の服で身を包み、首に銀の鎖をつけた四匹の猟犬を連れて別の男が通りかかった。その男は犬をつないで食べ物を取りに行き、すぐにそれぞれのために金の皿にのった贅沢な食べ物を持って戻ってきた。そして犬の飼い主は、犬たちが食事を楽しむにまかせた。ますます飢えた貧しい男は物欲しそうに犬の餌に目をやったが、自己憐憫と残っていた自尊心により、犬の餌へと向かうのには思いとどまった。

ところが四匹の犬のうち一匹は男の惨めな飢えた姿に気づき、その説話によれば、「こっちに来て食べ物をいくらとりなさい」と言わんかのように、彼に向かって合図した<sup>59)</sup>。男がためらいながらも近づくと、その犬は進んで食べ物を男に与えた。男は満足するまでしきりに食べた。そして立ち上がって立ち去ろうとすると、犬はまた男に合図を送り、もしよかったら食べ物の残りや金の皿までも持って行くように示した。人間が誰も見ていないことを注意深く確認し、男は皿を袖に隠して別の町へと去っていき、そこでただちに金の皿を高額で売り払った。この売却は、男を立ち直らせるのに役だった決定的な行為となった。彼は多くの商品を購入し、商売を始め、借金を返済するのに十分なほど稼いだ。すぐに彼は故郷の村に帰った。そこでは最近の稼ぎのおかげで家族とともにかつてのおおむね快適な生活に戻ることができたのだった。

しばらくして男は、犬とその主人に対して皿をもらったことに感謝し、お返しするために町に帰らねばならないと感じた。男は町へと出発した。近づいて見えてきたのは、町全体から人気なくなり、完全に荒れ果て、「砕けた残骸とカーカーとなくカラス」だけが残された姿だった<sup>60)</sup>。荒れ果てた町を歩き回ったところ、彼はよぼよぼの老人に出くわした。老人は彼に、神の見捨てたこんな場所になぜ来たのかと尋ねた。新来者は老人に彼の話と、過ぎ去りし日々を彼を助けた者たちにお返しするために来たことを伝えた。老人は馬鹿笑いして信じずに、犬が承知の上で男に贈り物をしたなどという考えをあざけた。失望した旅人は、以下の詩句を口にして家に帰るために町を離れた。「男も犬も、ともに行った。男よ犬よ、ともにさらば<sup>61)</sup>」。

この説話の犬は男が立ち直り、長生きするために犠牲を払った。自身の食べ物と金の皿を引き渡すことで犬は男が人生において経済的、社会的地位を取り戻すことを可能にしたのである。これは説話の最後に出てくる老人には届かなかった。彼は年と貧しさで衰え、犬の気前の良さを受け取ることができなくなっていたのである。この説話の男と犬は事実上、意志を通い合わせ、同じ言語を共有しているかのように対話した。警句的な最後の詩句は、人と犬の対等さを示唆しており、どちらも共感や

配慮、道徳的な正しさを持ちうることを強調している。主人が犬を養うのと同じように、犬は男を助けるのである。この説話に描かれた社会は、人間と動物が社会的な信頼と生計の面で親密な協力関係、結局は人間が犬に頼るのであってその逆ではない関係を結ぶものである。

犬はオスマン期のエジプトにおいて多くの有意義な社会的役割を果たした。そのなかのひとつは、羊や山羊などの動物を世話し、守る役目を果たすことだった<sup>62)</sup>。ある学識ある逍遙の聖人は、弟子たちに対して天国に犬がいることを証明するために「私は第十天が羊と山羊の群れでいっぱいなのを見たのだが、君たちも知っているように群れには犬が必要であって、犬なしではいられないから、羊飼いは群れを守るために犬を有していたにちがいない」と述べた<sup>63)</sup>。加えて犬は、病気と治療について色々示すことで医薬の面でも人間社会にとって有益のためになる役割を果たした。例えば、エジプトの人々は、どの植物が身体からの排泄を促すのかを犬を観察することで学んだ<sup>64)</sup>。犬は大食らいで有名で、それゆえ嘔吐を引き起こすために特定の植物を食べる戦略を立てていた<sup>65)</sup>。エジプトの医療従事者たちは、古代からオスマン期にいたるまで、人間のお腹の病気を治療するのにどの植物や薬草を使うことができるかを犬を観察することで学んだ<sup>66)</sup>。エジプトでは疫病のときでさえ、安全を確保するために犬や猫に注目が注がれた<sup>67)</sup>。また、エジプトでもムスリム世界の他の地域でも、犬を連れた猟の歴史は長い<sup>68)</sup>。ウサギ、ガゼル、野ウサギなどの動物はオスマン期のエジプトで犬が捕まえた最もよく見られる獲物だった<sup>69)</sup>。オスマン期の下エジプトでは、雄鹿を狩るのにも犬が使われた<sup>70)</sup>。群れの番としても猟犬としても最も評判がよかった品種は、エジプシャン・グレイハウンドとその近親種であるサルキーだった。

犬はオスマン期のエジプトにおいて軍事目的にもよく使われた<sup>71)</sup>。征服時におけるオスマン軍やエジプトに駐屯した様々な軍事集団は犬を使う兵を用いた。なかでも最も一般的な人員たちは、オスマン期のエジプトでサイマーニーヤと呼ばれた傭兵の犬飼たちだった<sup>72)</sup>。サイマーニーヤはもともと軍事遠征において先遣隊として用いられた犬の飼い手だった<sup>73)</sup>。犬たちは、先制攻撃隊として敵を襲い、陣地から追い出すために送り込まれた<sup>74)</sup>。サイマーニーヤとて、イエニチェリ部隊のなかでも帝国の猟犬を養い、世話をすることを主たる責務とする武官たちのなかからうまれた数多くの集団のひとつにすぎなかった<sup>75)</sup>。この種のそれ以外の集団としては、トゥルナジュバシュ、サムスンジュバシュ、ザールジュバシュがあげられる<sup>76)</sup>。サイマーニーヤは、オスマン期のエジプトにおいてこれらの部隊のなかでも最も傑出しており、これら犬の戦士たちは大いに効果的に用いられた。例えば、エジプトの名望家ギタス・ベイとイスマー



イール・ベイ・イブン・アワード・ベイのあいだで生じた1714年の戦いでは双方が相手を攻撃するのに犬を用い、最後はギタス・ベイの兵たちが、60のサイマーニーヤとマスケット銃、大砲、そしてベドウィンの傭兵部隊を組み合わせることで勝利したのである<sup>77)</sup>。

果てしないほどの数のカイロの野良犬さえも戦闘に用いられた<sup>78)</sup>。1711年に、ムハンマド・ベイという名の軍人は、カイロ城近くのルマイラ広場付近にあったアザブ軍本部を攻撃する助けとして野良犬連隊を用いた。彼は、広場周辺の地区から20匹の犬を集めるように部下を派遣した。部下たちは、犬のしっぽそれぞれに芯を結びつけるよう命じられた。犬は攻撃開始のときまでそのあたりの倉庫に留め置かれる。そしてしっぽの芯に火をつけ、アザブ軍本部に向けて犬を解き放ち、援護しつつ怖がらせて早く走るようにと、後方から大砲とマスケット銃で砲火することになっていた。計画では、兵舎で持ちこたえる者たちは、火をつけられた犬の猛攻撃に混乱し、驚き、恐れおののいて犬を撃ち、そうこうして弾薬を使い果たすはずだった。まかり間違っても犬が実際に兵舎まで生きてたどり着いたとしても、それはムハンマド・ベイとその攻撃隊からしてみればなおさらよかった。しかしながら結局のところ、攻撃計画は失敗し、兵舎は防衛に成功した<sup>79)</sup>。夕方、戦闘の後に、ルマイラ広場を歩いていたある兵士は、燃えたしっぽの痛みで吠えている犬の戦闘員を一匹見つけた。彼は怪我をした犬を抱え上げ、兵舎に連れて行き、その怪我を手当てした。

この説話で兵士が示した哀れみは、近世にわずかながら見られる犬と人の感情的な関係の一例であり、実際のところは近世のルールを証明する例外である。これまで見てきたように、近世オスマン期のエジプトでは犬と人のあいだに無数の有益で有意義な関係が存在したのだが、それはどれも、エジプトの人々と犬のあいだに強い感情的な関係（そしてもちろん、動物の痛みに対する人間の思いやり一般）が広く存在することを示すものではなかった。兵士は怪我をした戦闘犬を介抱したのだが、それは同じ人間が自身の利己的で俗な戦闘のための道具として犬を使い、社会的作用を独占した後のことにすぎない。猟師も犬を大事にしたが、それは犬との感情的なつながりゆえではなく、犬が供する社会的、経済的実用性のためだった。今日の人と犬との交流が主として好意や愛情、安心感、愛らしさ、感情を伴う伴侶関係を媒介としているのに対し、近世の人と犬の関係は主として、忠誠や保安、援助、信頼性、防御、生産性の論理に基づき、ほかに狩猟から生じる信望やごみの消費による実用性と機能があげられる。言い換えれば犬は、主として経済的、社会的、政治的、軍事的、医薬的な特性と能力ゆえに人間社会の役に立ち、有益なものであった。その価値は、感情的で情緒的な基盤に根ざしていたわけではなかった

のである。

## 悪い犬

これらすべては19世紀初めの数十年間に変容した。それは、エジプトの国家官僚機構がますます強欲で強力になるなか、それに対して犬の存在が直接的な脅威になった時期だった。犬は、秩序に対する見方と実践、規律的な統制と取り締まりのあり方、統治しやすい社会と経済を作り出す試みに挑戦したのである<sup>80)</sup>。その統治規範を現実のものとしようとするなか、オスマン帝国のエジプト行政府は、犬の挑戦だけでなく、急激に増大するカイロの人口と、空間と仕事に対する需要が作り出す重圧に直面した。犬の挑戦に対処するために行政府が用いた主たる戦略は、都市から犬を完全に排除することだった。そして、除去を実現するための主たる方法は、カイロのごみを市壁外へと押しやることだった。カイロの都市環境をめぐるこうした根本的な変化は、数千年間で初めて犬を都市のごみから引き離した。19世紀初めの30年ほどのあいだに犬は、社会的、経済的、衛生的、保健的役目を奪われるとともに、病気の媒介者、騒音の発生源、汚物と病気の源、そして社会秩序に対する脅威という新たな役割を与えられた。犬に対するこうした新生の見方は、病因学や衛生学、都市衛生、統治といった新たな概念と関連して生じたのであり、これら新たな概念はどれも都市から犬を排除する必要性を強めたのである<sup>81)</sup>。主として伴侶動物のように、新たな、そしてより好意的な役割を当時のエジプト社会における犬に見出そうと努めた人々もいたのだが、こうした努力に比べ、犬に帰され、新たに想像された厄介な役割と特性は圧倒的だった<sup>82)</sup>。こうして逆説的なことに、部分的にはかつての社会的、経済的、生態的役割に取って代わらんと19世紀に人間と犬のあいだに感情的なつながりがうまれ始めた一方、エジプトでは犬に対する広範囲に及ぶ暴力がかつてない形で増加したのである。

都市警備は人間と犬のあいだで相当な暴力が生じた最初の領域だった。18世紀から19世紀の転換期に、人間の警察が犬に取って代わるようになった。都市警備において犬を排除し、人間に置き換えることは、三年間の侵略期におけるナポレオン軍の占領体制のもとで初めて生じた<sup>83)</sup>。1798年11月30日の夜のことで、フランスの軍隊は、夜間警備の行進の際に彼らをしつこく悩ませてきた大量の犬をカイロから排除する活動に着手した<sup>84)</sup>。何百年も維持してきた警備の役目に従事する犬たちは、吠えたり小路や路地から追い立てることで、18世紀から19世紀の転換期にカイロの街路を巡回していた外来で未知のフランス軍を苦しめたのである<sup>85)</sup>。その兵士た

ちは、彼らにとって厄介で危険な存在を都市から排除するために、その11月の夜、見つかるだけの犬に食べさせようと毒の入った肉を入れたかごを持ってカイロの街路を歩き回った<sup>86)</sup>。朝、カイロには犬の死体がいっばいに広がっていた。市外へと犬の死体を取り除くために人員が雇われ、そこで死体は燃やされたのだらう<sup>87)</sup>。犬撲滅に向けたこうした大規模な取り組みは、エジプトで記録されたなかでは最初の組織的で広汎な犬殺戮の事例である<sup>88)</sup>。

20年ほど後、フランスによるかつての出来事をはっきりと引き合いに出すような、カイロの犬に対する類似した暴力の事例が見られた。1817年9月10日、エジプトの巡礼隊がヒジャーズへ向けてカイロを出発した。この年にはスエズからマッカ、マディーナに向けて紅海を渡る巡礼者を運ぶ船が不足していた。巡礼者の多くは、旅を完遂できないことに落胆し、カイロへと戻らざるをえなかった。なかには北アフリカや南東ヨーロッパから長距離を旅してきた者もいた。人々が大量に流入したことで都市はひどい過密状態に陥り、当時カイロでメフメト・アリ<sup>㊦</sup>が始めた数多くのインフラ事業に起因する大混乱によってそれはいっそう悪化した。都市を混雑させたのは人間だけではなく、小路や路地は原材料や商品、食料品、材木、建築現場からのごみでつまっていた。馬やロバ、ラクダは建設資材を運んだり、石やごみ、瓦礫を建設現場から片付けるのに用いられたため、そういった動物もこのときカイロの空間を争っていた。言いかえれば都市は、人間、動物、モノでいっぱいだった。エジプトの年代記作者ジャバルティーはさらに、1817年のこうした状況がカイロの犬にとって何を意味したのかを以下のように述べる。

これらすべてに加えて犬の群れ、ときには50匹もが絶え間なく道行く人やお互いに対して吠え、特に夜にはあらゆる人の邪魔をし、眠るのが無理なほどだった。フランス人たちはうまいことこうした犬を殺してくれた。彼らはひとたびカイロに住み着くと、よそ者だからと彼らに向かって吠えたてただけでこうした群れは何の必要にも目的にも役立っていないのを理解したのだった。それゆえ、ある人々は、毒入り肉を持って都市を歩き回り、朝にはすべての街路に犬の死体がいっばいに広がっていたのである。大人も若者もそれを都市外の空き地にひもで引きずっていった。こうして土地とその住民は犬から自由になった<sup>89)</sup>。

フランス人によるかつての反犬処置を称賛し、引き合いに出すことが示唆するのは、エジプトの人々がフランス人による犬の大量殺戮という発想と実践を喜んで借用したということである。19世紀初頭のエジプト統治におけるそのほかの技術と同様、国家による犬の扱いは、支配をめぐるヨーロッパの観念と手本についてメフメト・アリが理解したこと、見習いたいと思ったことに大いに由来していた。様々な産業、そして軍事訓練と教育のための行政機構を作り出すにあたり、彼が手助けとしてヨーロッパ人の顧問や相談役を雇ったことはよく知られている<sup>90)</sup>。比較的知られていないのは、植民地主義的なヨーロッパの政治と暴力をこのように模倣することは国家の公式施設の外部でも進展したということである。

フランスによるかつての暴力とは対照的に、1817年の犬の殺戮は何らかの明確な治安、あるいは軍事的な関心に基づいてはいなかった。むしろ、騒音や汚染、迷惑さ、社会的必要性といった公共の秩序と都市の過密に関わる諸問題こそ、1810年代にカイロから犬を一掃したいと思った人たちにとって最も差し迫った関心事だった<sup>91)</sup>。当時のメフメト・アリ政府による犬撲滅のための別の試みでも、エジプトの諸都市から犬を一掃することを正当化するためにこうした懸念が持ち出されている。こうした計画のひとつでメフメト・アリは、都市の公序を乱すのを防ぐためにカイロとアレクサンドリアからできるだけ多くの犬を駆り集めるよう、部下を派遣した<sup>92)</sup>。犬はアレクサンドリア港で船に乗せられ、エジプトの街路から犬を一挙に取り除くべく、出港した船は沈められた。ほぼ同時期の1820年代に、同じような一連の理由により、オスマン君主マフムト2世も同様に、犬を駆り集めてマルマラ海の島に船で送ることでイスタンブールの街路から犬を一掃しようとした<sup>93)</sup>。しかしながら船は、都市の岸辺で転覆し、望まれない犬たちは泳いでイスタンブールに戻った<sup>94)</sup>。このように、公共の秩序、都市の保健、衛生、迷惑さ、病気の統制といった問題は、19世紀前半のエジプト都市部において（そして、明らかに他の場所においても）人間と犬の関係を形づくる主な要因だったのである<sup>95)</sup>。

犬に対するこのような集団的な暴力は19世紀初頭のエジプトにとって新しく、数十年前ではまったく考えられないものだった。では、動物に対する人間の見方と扱いについて、19世紀初頭のエジプトで見られたこうした急激な変化をどのように説明したらいいのだろうか。こうした暴力はいったいどこから生じたのだろうか。これらの問いに対する答えの一端は、ジャバルティーが述べた明確な区別に求められる。それは、吠えて眠りを妨げる役立たずの野良犬と、より文明的で社会的に価値があって有益であるとそれとなく見なされた「土地とその住民」との区別である<sup>96)</sup>。こうした区別は、この時代の

viii. エジプト州総督就任後、オスマン中央政府に対して自立化の傾向を見せ、様々な改革を進めて近代国家エジプトの礎を築いた人物。



エジプトにおいて人間と動物のあいだに新たな隔たりが作り出され、拡大しつつあったことを証明している<sup>97)</sup>。カイロでもそれ以外でも、行政、教育、軍事、司法の施設が数多く設立され、拡大されたことで、人間の領域を、学び、健康、法、警備、官僚制の生産力の空間として、規制、統制された空間としてはるかに明確に定義することが求められた。犬は、ますます保護され、取り締まられるようになったこうした空間の境界を曖昧にした。そうすることが想定されていないときに、文字通りにも比喩的にも犬はこうした境界を横切り、そこで糞までしたのであり、それゆえに、国家の官僚機構の高まりゆく権威に直接挑戦したのである。19世紀初頭には、人間社会と同様、動物の領域も純然と定義され、きっちりと統御され、空間的に遮断されるようになっていた。犬と人のあいだの隔たりが広まるにつれ、犬に暴力をふるうこと、最終的にはまるきり始末しようと試みるのがより好ましく、望ましく、義務であると思なされるようになった。有意義な社会的役目を犬が引き受ける必要なしに人間社会が容易に成りたつのならば、そして、人間や他の社会的行為主体がこうした仕事を引き継いだ今となつては、なぜ犬を回りに置いておくべきなのだろうか。こうしてカイロで犬の存在は、彼ら自身の行為や過ちによってではなく、彼らを取り巻く人間と動物の状況が変化したことで問題となったのである。こうした問題の解決策のひとつは、単に犬を殺してしまうことだった。

もうひとつの意義深い解決策は、名高いごみ山をカイロから除去することだった。19世紀前半は、都市へと流入した大量の人々を収容するために再編と衛生化、整理と建設が進められた時代だった<sup>98)</sup>。街路からは汚物やごみ、瓦礫が片付けられた<sup>99)</sup>。病気を統制する手段として検疫制度が設けられた<sup>100)</sup>。病因として問題があると考えられたものを取り除き、市街拡張のためにより多くの土地を得るために、池や水路など、都市の水場は排水され、埋められた<sup>101)</sup>。当然ながらこれらすべてはカイロの野良犬にとって重大な影響を及ぼした。

メフメト・アリ政府にとって野良犬は厄介な害獣であり、潜在的な病気の媒介者であり、都市から抹消されるべき不潔な獣だった。それゆえ彼がカイロを整理し、再編しようと計画するなかには歴史的に居住してきた空間から犬を追い出し、都市のごみの消費者という都市生活における必須の役割を犬から奪うことも含まれていた<sup>102)</sup>。都市を犬から解放することと都市のごみの排出を整備し直すことはお互いに絡み合っており、19世紀初頭のそれらの取り組みは数十年間で、それまでの数百年間における両者の交流以上に深く人と犬の関係を変えたのである<sup>103)</sup>。

1820年代の終わりから1830年代の初めにメフメト・アリとその息子であるイブラヒムはカイロのごみ山を片

付け始めた<sup>104)</sup>。彼らは、拡大し続ける人口に資するより多くの建設用地を得るために、また臭い病源と見なしたものを都市から取り除くためにごみ山を除去しようと努めた<sup>105)</sup>。取り除かれたごみ山は、当時の都市改革の別の要素、すなわち市内の数多くの沼や池の埋め立てに利用することができた<sup>106)</sup>。1832年12月にカイロを訪れたイギリス人旅行者は、カイロの汚物やごみが「市外に運び出される際、以前のように投げ捨てて積み上げられるのではなく、周辺部の穴やくぼみ、でこぼこを埋めるのに用いられている。一方、かつてのごみ山はすべて、巨額の費用で片付けられ、こうして得られた土地は菜園やオリーブ園として用いられている」と述べている<sup>107)</sup>。1830年代初頭を通してイブラヒムは、カイロとその周辺あちこちの土地を埋め立て、ならすのに片付けたごみを用いた。ごみ山は、「ガーデン・シティ」として知られるようになる場所に建設用地を得るために片付けられた。その後すぐにイブラヒムはそこに木を植え、道路を作ることを命じている<sup>108)</sup>。この場所から出たごみは都市南方のカースィム・ベイ池を埋めるために運ばれた。新たに改良を施されたこうした土地も開発された。後ほど、1830年代には、ブーラク・エズベキーヤ間の新たな道路周辺の低地を埋め立てるために、別のごみ山が都市の北部と北西部から片付けられた。

ごみ山の除去は人間の建設事業に利用可能な市内の用地の拡大につながったが、カイロの犬にとっては有害だった。それにより犬は、食糧の重要な源と集会の場所を奪われたのである。ごみ山除去を企てる事業に関する多くの記述は、糧を求めて足繁くごみ山に通っていた犬たちの「野蛮さ」、そして彼らが激しく吠えたことについて述べている<sup>109)</sup>。明らかに犬は、彼らを取り巻く世界が劇的に悪い方へと変化しているのを理解していたのである<sup>110)</sup>。犬と都市を共有する人間にしてみれば、カイロのごみ山が撤去されたことで犬はますます見当違いな存在に思えた。もはや都市をきれいに保つのに役立たないのであれば、カイロの犬はなんのためにいるのだろうか。人間社会にとって犬がもはや有益で有意義ではないというだけの問題ではない。犬は今や、都市生活にとってあからさまに有害だと判断された。19世紀初頭に病気に対する見方が変化した、人間の身体を取り巻く物質的な自然環境のはたらきによるものと理解されるようになると、不潔で臭く、きたならしい大量の犬は、多数の人間がいるまっただなかには望ましくない存在と思なされるようになっていった<sup>111)</sup>。このように、カイロのごみ問題とごみが養ってきた犬たちは、都市の管理に関する3つの大きな問題を明示している。すなわち、ごみの除去、病気、そして利用可能な空間である<sup>112)</sup>。

第一の問題は、大量の人間と彼らが都市で作り出すごみをどうするかである。人の数が増えるのに伴ってごみ

の量が増えるとともに居住空間の需要も高まるなか、この問題の解決策は市外にごみをすべて移動させるか、カイロ市内の池や沼を埋めるためにごみを集めるかだった。これと関連した二つ目の問題は、都市人口の拡大がカイロにおける病気の理解にいかん影響を及ぼしたかである。都市内で人間同士、また人間と動物が近くにいたことで、病気がどのように生じ、移り、治るかについての懸念が生じた<sup>113)</sup>。エジプトのヨーロッパ人医療従事者たちの多くとは対照的に、メフメト・アリと政府役人の大半は接触感染論者だった<sup>114)</sup>。彼らは、病人と汚物に物理的に近くにいることで健康な人々が病気にかかる可能性が高まると信じていた。臭うごみの山もじめじめした水場もみすぼらしい犬も、すべて潜在的な病気の媒介者と見なされるようになり、社会から消し去るべき恐怖と嫌悪感の対象と考えられた<sup>115)</sup>。歴史研究者のハーレド・ファフミーがこの時代について述べているように「当局の政策の大半を特徴づけたのは都市の悪臭に対する懸念であり、こうした懸念の背景には病気の伝染に関して有力だったミアズマ説があった<sup>116)</sup>」。病気、場所、そして人間の身体の関係についてのこうした新たな考えゆえに、エジプトで犬は前例のない形で医療知識、政府の活動、そして都市の取り締まりの対象とされた<sup>117)</sup>。最後に、乏しい資源と縮小する都市空間を求める重圧が増大し、それらをめぐって人と犬が競い合うようになるなかで、病気とカイロのごみに対する懸念は人と犬の間に影響を及ぼした。空間が貴重であり、犬がもはや有意義な社会的、経済的役目を持たないなかでは、人と犬のあいだに新たな、敵対的な関係が発展した。両者が争い、敵対する新たな環境においては人間が優位に立ち、その優位性によってかつて動物が居住し、統制していた空間を人間が奪い、犬と他の動物をカイロの外に暴力的に追いやるのはいつまで明白なことだった。

カイロの犬の数が減少したことで生じた主な結果として、犬に対する人間の態度が変化したことがあげられる。19世紀初頭に犬は、少なくともそれまでの千年間の場合と比べて、嫌悪感と暴力を伴うずっと否定的なまなざしを向けられるようになった。都市の人間から見て、犬がマイナス面を補う社会的、経済的、道徳的特性をもはや持たなくなったなか、優位な立場にあった大半の人間の目には、古いものにせよ新しいものにせよ、犬の否定的な特性が見えるようになった。すなわち、儀礼的な不浄性、迷惑さ、病気の潜在性、糞便である。1820年代末から1830年代に何度かエジプトに居住したイギリス人東洋学者のエドワード・ウィリアム・レインは、動物に対するエジプトの人々の態度の変化を確認している。

かつてエジプトの人々と交流した際には、彼らが物言わぬ動物に対して人情を持っているのを見ること

ができ、とてもうれしかった…（中略）…あのころ彼らのあいだでは殺人や押し込みといった残忍で暴力的な犯罪は非常にまれだった。しかし今では、獣に対しても人間同胞に対しても人情の点で、エジプトの人々の大半が悪い方へと大きく変わってしまったのが分かる。予想されることかもしれないが、政府の厳格さが増したことが人々のあいだに横暴さと、あらゆる犯罪の増加を生み出した。しかし私は、ヨーロッパの人々の振るまいがこうした結果を導くのに大きく貢献したと考えたいようにも思う。というのも、アレクサンドリアやカイロ、テーベ（ルクソール）のように西洋人が居住する、あるいは頻りに訪れる場所以外で物言わぬ動物に対する冷酷な振る舞いを見たのを思い出せないのだ<sup>118)</sup>。

フランスによる犬の間引きという先例が証拠となることだが、レインは、「物言わぬ動物」に対する人情ある扱いから暴力的な扱いへの転換を明らかにヨーロッパの影響のせいにしており、またそうした転換を、政府の新たな規制と行政上の実践が促進した「横暴さ」に結びつけている。メフメト・アリ政府はエジプトの動物の扱いの点でより過酷で不寛容で無慈悲になっただけでなく、エジプトの人間に対してもこうした暴力をますます振るうようになり、レインの意見ではその結果、人々もお互いに対してより暴力的になった。それゆえ、エジプトの人々の犬に対する（そして、一部の人間に対する）嫌悪感、そして犬はマイナス面を補うほど有意義な社会的、道徳的特性を持たない不浄な生き物でしかないという考えは、この時代に固まった見方であるように思われる。レインが認めているように、この時代がエジプトで広範囲に犬に対する暴力が初めて振るわれるようになった時代でもあったことは意外ではない。エジプトの歴史で初めて、犬は今や「単なるきまぐれ」以外のなにものでもない理由で、カイロの街路で頻りに叩かれるようになったのである<sup>119)</sup>。

人と犬の関係が変化して生じたもうひとつの結果は、人と犬のあいだにまったく別の関係が潜在的に生じたことだった。そうした関係は後になって初めて完全な発展を遂げることになる。犬がもはや主として都市のごみの消費者ではなくなった一方、当然ながらカイロから完全に除去されたわけでもないなか、犬のなかにはエジプト社会で新たな役割を担うものも出てきた。より有益な関係の一端として、犬は伴侶動物の役割を果たすようになった。エジプトのエリート層にとって、犬がペットとして広まるようになるのはようやく19世紀末のことである<sup>120)</sup>。人と犬のあいだの感情的なつながりが後に発展したのは、オスマン期のエジプトで人と犬の関係が変化した多くの結果のひとつである。ただしそれ以前にも

人と犬のあいだの感情的な関係は、あくまで規則を証明する例外のような事例としてではあるが、垣間見ることができる。

1830年代にカイロに住む孤独な女性の犬が死んだ<sup>121)</sup>。「夫も子どもも友達もない」なか、犬は女性にとって最も信頼でき、愛しい伴侶だった<sup>122)</sup>。犬が死ぬと彼女は、守られてきた慣例に背き、ムスリムのための正式な埋葬で遇することを決心した。それどころか、厳粛な埋葬地で静かに形式ばらず埋葬するよりも、カイロで最も神聖で重要な埋葬地のひとつであるイマーム・シャーフィイ廟を擁する墓地に犬を葬ることを決意した。彼女は、ムスリムのための正式な埋葬に規定されているように犬の身体を洗い、遺体を適切な屍衣でくるみ、遺体をのせる棺台を用意した<sup>123)</sup>。そして、彼女の街区から墓地へと練り歩く際に決められた嘆きと最後の儀礼を遺体に施すために、クルアーン読誦者、歌い手、泣き女を雇った<sup>124)</sup>。これらすべては、人間の正式な埋葬にふさわしい形式で行われた<sup>125)</sup>。葬列が都市のなかを進むと、女性は一人で暮らし、近親もいないと誰もが思っていたので誰が死んだのか確信が持てず、近所の多くの女性がお互いにささやきあった。孤独に暮らすこの女性をよく知る者はいなかったもので、棺台の遺体が誰であるのかを思い切って尋ねる者はだれもいなかった。

しばらくしてけっきょく、誰が死んだのかと女性に尋ねる者が出たところ、女性は「かわいそうな我が子なのです」と答えた<sup>126)</sup>。彼女に子どもがいないことはよく知られていたもので、これを聞いた隣人の女性たちは彼女を嘘つきと非難した。これ以上秘密が広がらないようにと、女性は彼女たちに、死んだのは彼女の犬だと告白し、誰にも言わないようにと懇願した。だが、それほどしないうちに、参加している葬列は犬のためのものだということが集まった群衆に知れ渡った<sup>127)</sup>。葬儀はすぐに中止となり、男たちは集まって女性の不遜さ、無礼さを騒ぎ立て、雇われの歌い手たちとクルアーン読誦者たちは彼らに恥ずかしい思いをさせたと彼女をののしった。本格的な乱闘へと発展するのを防ぎ、女性を守るために警察が集まった。

彼女にとっては世界で唯一の存在する伴侶、彼女に言わせれば「我が子」なのであり、犬に対するこの女性の愛情と思いやりは、今日の我々にしてみれば驚くほどのことではないだろう。イマーム・シャーフィイ廟付近の威信ある墓地でムスリムのための正式な埋葬を犬に供することは、イスラームの確立した儀礼とエジプトで遵守されてきた慣例からしてみればまったく不適切であると彼女は知っていたのだが、愛しい伴侶を尊重するためにその危険を引き受けつつ、屍衣の下にある遺体の身元を隠し通そうとしたのである<sup>128)</sup>。葬儀が犬のためであることを知った、そして人と犬のあいだにこうした密接

で感情的な関係があると理解した参列者たちの暴力的で激しい反応は、19世紀初頭に変化しつつあった犬に対するエジプトの人々の態度にはそぐわない。人間の死者を追悼するための葬儀に犬の参加を許すことは、この時代には明らかに受け入れがたいことだった。19世紀初頭にエジプトの人々の大多数は、ムスリムと犬とが預言者の時代から何百年も深く交わってきたこと、まして、ハディースによれば、預言者自身がときおり犬の側で礼拝をしたことをおそらく知らなかっただろう。また、ムスリム知識人たちは忠義心や防衛の能力、知力、人間社会における有意義な社会的、経済的役割といった犬の肯定的な性質に関する繊細で慎重な論考で、千年以上のあいだ長々と複雑な議論を展開し、論じてきたのだが、これらは19世紀のエジプトの人々にとってみれば見当違いだった。犬に対する思いやりや、犬の行動を観察して様々な植物の薬効性を学ぶこと、あるいは犬を人間の墓に正式に埋葬すること(多くの先例がある現象である)は、どれも取るに足らないことだった<sup>129)</sup>。19世紀初めに、人と犬の新たな秩序が作り出されると、ふたつの生き物は別々の領域に分かたれた。そしてこの時代にこそ、ムスリムは常に、またただ単に犬を儀礼的に不浄だと見なしてきたという現代の紋切り型が、ムスリム世界における人間と犬の関係に関する最も一般的な理解として定着したのだろう。生きていようと死んでいようと、犬を人間のように扱うことを、19世紀初頭のエジプトの人々はほとんど誰も許容できない並外れた社会的逸脱行為と見なしたのである。

## おわりに

オスマン期エジプトの犬の歴史は、人間と動物との関係に見られるなにか不釣り合いな矛盾のようなものを示している。犬の臭い、動き、そして排泄物は1815年あたりまでのエジプトの人々にとってはまず問題ではなかったのだが、わずか数十年のうちに犬のこうした特性は、汚物と腐敗、墮落の主体として犬をエジプトから排除する事業の概念的な支柱として浮上してきた<sup>130)</sup>。けれども、犬が人間の領域の多くの部分から暴力的に切り離されるにつれ、エジプトの人々のなかには犬との感情的な関係を築くべく、家に連れてくる者もあらわれた。こうした伴侶関係は19世紀初頭に一般的に認められ、尊重されたものではなく、20世紀になってようやく広まることになるものだった。したがって犬は、生産的な緊張関係のもと、犬の働きと愛情に対する人間の欲求と、犬の動物性と本能に対する人間の嫌悪感の両方を引き出し、保持したのである<sup>131)</sup>。感情的には親密だが生物学的には際限なく隔たった存在として、犬は、人間と動物のあ



いだで剣が峰に立たされた（そして今も立っている）。数千年間も人間と動物の境界では人間に近い側で暮らしてきた、あるいは少なくとも生産的に境界を跨いできた後、19世紀初頭のエジプトで犬は、完全に動物と見なされたのだった。

それゆえ、オスマン期カイロの犬の歴史は、18世紀から19世紀への転換期にエジプトで生じた比類なき変容が、人と犬の関係および人間と非人間が国家と有する関係をいかに永続的に変えてしまったのかを前景に示しているのである。近世において、犬の忠誠は主人個人に向けられており、主人は犬に対する統制と犬に対する一連の責任の両方を独占していた。19世紀にオスマン領エジプトの唯一の主人は国家になった。犬であろうとなかろうと、忠誠、忠義、服従はもっぱら国家にのみ向けられることになった。家族でもイエでも個人でもなく国家こそ、生命、経済、社会に関して最終的な決定を下し、差配することができる唯一の存在になることになった。統治をめぐるこうした理解と実践は、エジプトで人間が対象とされる前に、カイロの野良犬の生活に影響を及ぼした。自主独立の犬の飼い主や、さらに大きな問題として、人間と関わることに何も関心がないような無所属の野良犬は、秩序と安定、統制をめぐるエジプトの新体制のもとには居続けることができなかつた<sup>132)</sup>。支配に関するこうした新たな考えと方法がもたらした力ずくの帰結として、犬の生活は永続的に変化した。そしてそれはまもなく人間にも及ぶことになるのである。

## 注

1. Kasaba, *The Ottoman Empire and the World Economy*, 23-27.
2. こうしたことのほとんどは以下で詳述されている。Al-Raf'i, 'Asr Muhammad 'Ali; Marsot, *Egypt in the Reign of Muhammad Ali*. この時代の教育改革については、'Abd al-Karim, *Tarikh al-Ta'lim fi 'Asr Muhammad 'Ali*.
3. Raymond, "La population du Caire"; Panzac, "Alexandrie."
4. 多くの社会でそうであるように、ムスリムの著述家たちも他の種類の犬に比べて黒い犬をとりわけ厄介だと見なしていた。Abou El Fadl, "Dogs in the Islamic Tradition and Nature."
5. 比較目的で検討すべきは、古代から少なくとも19世紀にいたるまで、チベットと北中部インドにある今日のウツタル・プラデーシュのあいだで非常に活発な犬交易が存在したことである。Joshi and Brown, "Some Dynamics of Indo-Tibetan Trade." 唐代中国における犬の有用性について、Schafer, "The Conservation of Nature."
6. Abou El Fadl, "Dogs in the Islamic Tradition and Nature"; Maghen, "Dead Tradition," 297-313.
7. Maghen, "Dead Tradition," 298.
8. イスラーム法研究者のヨーゼフ・シャハトは、イスラームにおける犬の不浄性に関する観念はユダヤ教から借用されたと考えた。Schacht, *The Origins of Muhammadan Jurisprudence*, 216. ゼエヴ・マゲンはこの見方に異論を唱え、タルムードには犬が不浄だと挙げられている箇所はなく、紀元7世紀から10世紀におけるユダヤ教徒の実践にはこうした見方の存在の証拠は見いだせないと述べた。マゲンの考えでは、シャハトは犬を不浄だとする見方をセファルディム [イベリア半島系ユダヤ教徒] 学者たちの記述に見いだしたが、彼ら自身が犬の不浄性に関するイスラームの観念に影響を受けたとマゲンは述べている。マゲンにしてみれば、こうした借用された見方が規範的なユダヤ信仰に代表的なものであるとシャハトは誤って見なしたということである。さらにマゲンが論じるように、証拠が指し示しているのは実際にはまったく逆の現象であり、犬に関するイスラームの見方の、セファルディム・ユダヤ人に対する影響なのである。Maghen, "Dead Tradition," 297-313.
9. Koran 7:176. [クルアーンの日本語訳は以下を参照した。中田考監修『日垂対訳クルアーン [付] 訳解と正統十読誦注解』中田香織, 下村佳州紀訳, 作品社, 2014年]
10. 豚と犬の不浄性に関する見方の類似については以下を参照。Maghen, "Dead Tradition," 297-313.
11. ここで述べられる病気として最も可能性が高いのは狂犬病だろう。20世紀末の反狂犬病運動の際に、エジプトの野良犬に見つかった寄生虫の同定に関しては、Mikhail et al., "Identification of *Trichinella* Isolates."
12. Abou El Fadl, "Dogs in the Islamic Tradition and Nature"; Maghen, "Dead Tradition," 298-99.
13. Abou El Fadl, "Dogs in the Islamic Tradition and Nature."
14. Maghen, "Dead Tradition," 300; Goldziher, "Islamisme et Parsisme," 18. 預言者存命中の犬に関するゴルトツィーエルの考察は、イスラームとゾロアスター教の比較研究の一環である。ゾロアスター教における犬についての研究として、Moazami, "The Dog in Zoroastrian Religion." ゾロアスター教における動物について、より広くは、Moazami, "Evil Animals in the Zoroastrian Religion"; Foltz, "Zoroastrian Attitudes toward Animals"; Forrest, *Witches, Whores, and Sorcerers*, 92-93, 104-6, 110-11, 118-20.
15. Abou El Fadl, "Dogs in the Islamic Tradition and Nature."
16. Ibid.
17. Ibid.
18. Koran 18:18; Viré, "Kalb." 「洞窟の仲間たち」はキリスト教の伝統では「エフェソスの7人の眠り男」として知られている。
19. Perlo, *Kinship and Killing*, 195-96.
20. Fudge, "Dog"; Viré, "Kalb."
21. Dankoff, "Animal Traits in the Army Commander," 99-104.
22. 比較の観点から、Bousquet, "Des animaux."
23. こうした展開のいくつかに関する考察として、Mikhail, *Animal*, 72-77.
24. アジュフル村に関しては、Ramzi, *Al-Qamus al-Jughrafi*, part 2, 1:53.
25. Ebied and Young, "An Unpublished Legal Work," 252. この論文は、リーズ大学所蔵で（1977年時点で）未公開で、カタログ化されていなかった写本のアラビア語テキストと英訳を含んでいる。ここではすべてアラビア語テキストを参照している。
26. アズハル時代の多数の教え子のうち幾人かについて、Al-Jabarti, 'Aja'ib al-Athar, 1:107-10, 2:168, 2:242.
27. Ebied and Young, "An Unpublished Legal Work," 254.
28. Ibid.
29. Ibid.
30. Ibid. 8点目でアジュフリーーは、野生動物が頻繁に水を飲むことがよく知られていたにもかかわらず、マッカとマディーナのあいだに位置する池の水を飲むこと、清めのために用いることを預言者が許容したと主張している。
31. Ibid.

32. 原文では, *al-kilab luhatha la yakhlu famuha 'an al-rutubat wa tasaqut al-lu'ab*. Ibid., 256.
33. Ibid., 256-57.
34. Ibid., 254.
35. Maghen, "Dead Tradition," 307.
36. Ebied and Young, "An Unpublished Legal Work," 254.
37. Ibid., 255.
38. Ibid., 256.
39. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 2:556. このフランシスコ会士について詳しくは, Hamilton, *The Copts and the West*, 80. オスマン帝国の他地域における犬に関するほぼ同時代の記述として, Schick, "Evliya Çelebi'den Köpeklere Dair."
40. これほど多くの犬がいたのはカイロだけではなく, エジプトの他の都市も同様だった。ダミエッタとその犬に関して, Gonzales, *Voyage en Égypte*, 2:556.
41. Veryard, *An Account of Divers Choice Remarks*, 319.
42. 比較事例として, 19世紀のニューヨークにおける衛生目的での豚の利用について, McNeur, "The 'Swinish Multitude.'"
43. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 1:182.
44. Ibid.
45. Ibid., 1:210, 2:557.
46. これはオスマン期のイスタンブルに関しても同様である。Pinguet, "Istanbul's Street Dogs," 354-55.
47. アントニウス・ゴンザレスは, 犬はモスクに入ることを許されたが, 小さめの人間と犬が礼拝者の邪魔をすることを懸念して, 犬(と小さな子どもたち)は教会に入ることを許されなかったと注意深く書き留めている。Gonzales, *Voyage en Égypte*, 1:222. 19世紀末のアメリカで虐待反対をめぐる言説がいかに動物と子どものあいだに共通性を導き出していたのかを示す研究として, Pearson, *The Rights of the Defenseless*.
48. Al-Damardashi, *Tarikh Waqayi' Misr al-Qahira al-Mahrusa*, 115; Gonzales, *Voyage en Égypte*, 1:22.
49. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 2:570.
50. Fleming, *Travels on Horseback*, 233-34, cited in Skabelund, *Empire of Dogs*, 19.
51. この点でイスタンブルに関しては, Pinguet, "Istanbul's Street Dogs," 353-54.
52. Lane, *Cairo Fifty Years Ago*, 35.
53. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 86; Lane, *Cairo Fifty Years Ago*, 62.
54. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 86.
55. Lane, *Cairo Fifty Years Ago*, 37.
56. アレクサンドリアでも, 市壁の回りのごみ山は都市の犬が主権を有する領土と理解された。そのうえ, ある犬の群れが他の犬や人間からごみ山を守るというように, アレクサンドリアではこうしたごみ山をめぐる縄張り争いが頻繁に起こっていたようである。Henniker, *Notes during a Visit*, 9-10.
57. エジプトの様々な都市でごみから得られる食べ物をめぐって城壁内の犬のあいだで競合関係が見られたことに関して, *ibid.*, 24; St. John, *Egypt and Mohammed Ali*, 2:280. 比較事例として, オスマン期イスタンブルでごみを食べる犬について, Pinguet, "Istanbul's Street Dogs," 354-55.
58. Al-Shirbini, *Hazz al-Quhuf*, 2:238-40.
59. Ibid., 2:238.
60. Ibid., 2:239.
61. Ibid., 2:240.
62. Viré, "Kalb." インドのヒマラヤ地方における家畜番としての犬の社会的, 経済的重要性に関する有益な考察として Joshi and Brown, "Dynamics of Indo-Tibetan Trade," 308-9.
63. Al-Shirbini, *Hazz al-Quhuf*, 2:84.
64. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 2:557, 2:614.
65. オスマン期エジプトにおける犬の嘔吐のイメージを利用した例として, al-Shirbini, *Hazz al-Quhuf*, 2:367; Al-Jabarti, 'Aja'ib al-Athar, 4:143.
66. 医学の領域ではまた, ジャーヒズが「犬の汚物」は刺し傷の治療に大いに効果があると報告している。Pellat, *The Life and Works of Jāhiz*, 146. 20世紀イエメンにおける犬の排泄物の医療上の利用について, Schönig, "Reflections on the Use of Animal Drugs in Yemen," 169.
67. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 1:182.
68. Mikhail, *Animal*, 126-27, 130-36.
69. Lane, *Manners and Customs*, 95.
70. Gonzales, *Voyage en Égypte*, 2:553.
71. 戦争の多様な領域での犬の利用について, Lemish, *War Dogs*; Skabelund, *Empire of Dogs*, 130-70; Dean, *Soldiers and Sled Dogs*; Buecker, "The Fort Robinson War Dog Reception and Training Center"; Seguin, *Dogs of War*; Alves, *The Animals of Spain*, 150-57; Putney, *Always Faithful*; Downey, *Dogs for Defense*.
72. Saymaniyya はベルシア語の単数形の語 *segban* (トルコ語では *sekban*) がアラビア語化したものの複数形であり, *seg* は「犬」を *ban* は「番」を意味する。トルコ語で「犬」を意味する様々な単語の語源について, Caferoğlu, "Türk Onomastiğinde 'Köpek' Kültü."
73. Sertoğlu, *Osmanlı Tarih Lûgatı*, 309; Al-Damurdashi, *al-Damurdashi's Chronicle of Egypt*, 85n251.
74. 犬のこうした利用は続いている。2011年にパキスタンでウサーマ・ビン・ラーディンを殺害したアメリカの攻撃では, ビン・ラーディンの邸宅群を襲撃した特殊部隊は隠された爆発物をかき分け, 襲撃対象へと導くために先行した犬たちの助けを得た。Harris, "A Bin Laden Hunter on Four Legs." アフガニスタンなどでの米軍による犬の利用に関して, Goodavage, *Soldier Dogs*.
75. 色々な軍事目的で様々な動物を用いる猟犬番部隊の19世紀初頭の一例として, Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi, Evrak 1173/72 (AH 13 Cemaziyel'ahir 1215/1 November 1800).
76. Artan, "A Book of Kings," 300. 19世紀初頭でもオスマン帝国のイエニチェリ部隊のうち, 第64隊と第71隊は数多くのマスタフヤテリアなどの犬を戦力の一環として正式に保持していた。Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Cevdet Saray 6637 (AH 13 Muharrem 1216/26 May 1801).
77. al-Damurdashi, *al-Durra al-Musana*, 109-12.
78. Ibid., 88-89.
79. この説話の少し異なる版に関して, Al-Damardashi, *Tarikh Waqayi' Misr al-Qahira*, 160-61.
80. 都市部の犬が国家の権威にいかに関与したかに関する比較事例として, Walton, "Mad Dogs and Englishmen"; Palsetia, "Mad Dogs and Parsis"; Schick, "İstanbul'da 1910'da Gerçekleşen Büyük Köpek İtlâfı"; Sanders, "Animal Trouble and Urban Anxiety."
81. ほぼ同時代の, ニューヨーク市から豚を排除しようとする試みに関して, McNeur, "The 'Swinish Multitude.'"
82. 伴侶動物, ペットとしての犬に関する歴史文献は膨大にある。著者にとって最も有益だった研究として, *The Beast in the Boudoir*; Fudge, *Pets*; Grier, *Pets in America*; Tuan, *Dominance and Affection*; Haraway, *When Species Meet*; Ritvo, "Pride and Pedigree."
83. フランスによるエジプト侵略の全体像に関して, Raymond,

- Égyptiens et Français au Caire*; Cole, *Napoleon's Egypt*.
84. Al-Jabarti, 'Aja'ib al-Athar, 3:51-52.
85. エジプトを訪れた人々はしばしば、犬が外国人やキリスト教徒である彼らに対して特に攻撃的のように見えたと述べている。1870年か71年にロゼッタを訪れたアメリカ連合国の元海軍士官、ジェームズ・モリス・モーガンは、ある晩「月を見て少し散歩しようと路地に出た。唯一出会った生き物は、うなって立派な家の入口へと姿を消したバリア犬だった。これら野生の犬は、現地の人々に対してはまったく無害なのだが、キリスト教徒に対しては、とりわけ群れをなしているときは、非常な嫌悪感を示すのであり、一匹に出くわしたならその近くにもっとたくさんいるのが確実なのは分かっていたので、私は邸宅に戻るのを決心した」と書いている。Morgan, *Recollections of a Rebel Reefer*, 294. エジプトの犬の外国人認識に関するこうした見方の他の例として、Henniker, *Notes during a Visit*, 135; St. John, *Egypt and Mohammed Ali*, 2:112.
86. 犬を殺すために毒肉を用いた南アフリカの比較事例として、Tropp, "Dogs, Poison, and the Meaning of Colonial Intervention."
87. この事例は、ロバート・ダートンが分析した1730年代のバリでの「猫の大虐殺」を想起させる。動物に対する暴力をめぐるこれら2つの事例で特に重要なのは、犬と猫が夜に騒音を発し、人間の貴重な睡眠を奪い、夜間警備の行進を妨げたことである。Darnton, *The Great Cat Massacre*, 75-104. 夜間における犬の問題については加えて、Koslofsky, *Evening's Empire*, 202, 218.
88. ヨーロッパにおける都市の犬殺戮の歴史として、McHugh, *Dog*, 130-34.
89. Al-Jabarti, 'Aja'ib al-Athar, 4:396.
90. 例えば、Marsot, *Egypt in the Reign of Muhammad Ali*, 162-95.
91. 都市の犬と騒音に関して、Beck, *The Ecology of Stray Dogs*, 68-69.
92. Viré, "Kalb."
93. Pinguet, "Istanbul's Street Dogs," 355-56.
94. イスタンブールの住民のなかには船の沈没を、都市から犬を取り除こうとしたことに対する神罰と捉える者もあった。犬をイスタンブール付近の島へと移動させる同様の取り組みはアブデュルアズィズの治世（1861-76年）にも生じた。このとき、スイヴリ島への犬の移送はうまくいった。しかしこのときも、犬の排除の少し後にイスタンブールのいくつかの場所で生じた火事を、犬に対する人間の冷酷さへの神罰と捉える者もあった。
95. Beck, *Ecology of Stray Dogs*, 45-69.
96. Al-Jabarti, 'Aja'ib al-Athar, 4:396.
97. 種族間のこうした区別の発生に関して、Thomas, *Man and the Natural World*.
98. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 83-97; Raymond, *Cairo*, 291-308; Fahmy, "An Olfactory Tale," 155-59. 世紀の後半には、ヨーロッパ人とエリートの地区と現地民と貧民の地区へとカイロ（およびアレクサンドリア）を2つに分離する動きが、エジプト都市部の拡大を引き起こす最も根本的な原動力としてあらわれた。Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 98-117; Raymond, *Cairo*, 309-39; Fahmy, "An Olfactory Tale," 155-87. アレクサンドリアについては、Fahmy, "Towards a Social History of Modern Alexandria"; Fahmy, "For Cavafy, with Love and Squalor."
99. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 91-92, 95-97; Raymond, *Cairo*, 303.
100. Mikhail, *Nature and Empire in Ottoman Egypt*, 230-41.
101. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 91-93; Raymond, *Cairo*, 302-3.
102. 地方でより一般的なことではあるが、カイロではときおり、ロバがごみを引くの用に用いられた。Tietze, *Muṣṭafā 'Alī's Description of Cairo of 1599*, 51.
103. 同様のことは、19世紀前半のニューヨーク市の豚にも生じた。McNeur, "The 'Swinish Multitude.'"
104. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 92; Raymond, *Cairo*, 302-3; and Fahmy, "An Olfactory Tale," 174.
105. ごみ山の除去についてより詳しくは、Lane, *Cairo Fifty Years Ago*, 37.
106. それゆえ、19世紀の多くの都市にとってそうであったように、カイロの拡大は文字通り、ごみの上に築かれた。ニューヨーク市の事例として、Humes, *Garbology*, 45.
107. St. John, *Egypt and Mohammed Ali*, 1:140-41.
108. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 92.
109. St. John, *Egypt and Mohammed Ali*, 1:141-42.
110. 例えば、カイロをしばらく離れて戻ったジェームズ・オースタス・セントジョンが1832年12月に述べねばならなかったことを検討してみよう。「カイロには何日もいたわけではないが、ごく最近書かれた旅行者の記述のときからも、その外観に多くの変化が生じたことが分かる。以前は街路はうんざりするほど汚かったが、今ではその全般的なきれいさが際立っており、一日に3回、掃除がなされている。Ibid., 1:140.
111. 病気と環境に対する理解が19世紀にどのように変化したかについての有益な分析として、Nash, *Inescapable Ecologies*.
112. こうした問題に関する有益な比較事例として、20世紀のボルティモアにおける犬の調査について、Beck, *Ecology of Stray Dogs*.
113. Abu-Lughod, *Cairo: 1001 Years*, 86.
114. 19世紀のエジプトにおける病気に対する見方はエジプトの人々とヨーロッパ人で相容れなかった。Kuhnke, *Lives at Risk*.
115. 病気と腐敗の潜在的な問題源としてほかには、汚水槽、屠殺場、魚屋、墓地、排尿と排便が行われる公共の場があった。後に1860年代末から1870年代には、公共事業相のアリー・ムバラクが病気と汚物の危険地帯をすべて取り除く形でカイロの再編に乗り出すことになる。Fahmy, "An Olfactory Tale"; Mitchell, *Colonising Egypt*, 63-94.
116. Fahmy, "An Olfactory Tale," 166.
117. 都市の犬を医療の対象と見なすこうした動きは19世紀を通じて発展を続け、とりわけイスタンブールに設置された犬診療所に結びついた。それは、帝国医療全般の行政的な管轄に属する施設だった。犬のためのこうした施設の歴史について、Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Dahiliye İdare 55.5 (AH 5 Şevval 1328/10 October 1910). 同じような犬診療施設は帝国の他の場所にも設立された。例えば、1916年に東部アナトリアのエルズィンジャンに設立された犬疾病診療所については、Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Dahiliye Nezareti Kalem-i Mahsûs Müdüriyeti 43.36 (AH 14 Cemazilevvel 1334/19 March 1916). 加えて、人間や他の動物と同様、19世紀末から20世紀初頭に犬は、エジプトや帝国の他の場所で次第に検疫の取り組みの対象とされるようになる。例えば、当時ヨーロッパで犬を死に至らしめた未知の病気が拡大するのを恐れて、1923年にはヨーロッパからアレクサンドリアへとやってきた犬は10日間、隔離所に留め置かれた。Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Hariciye Nezareti İstanbul Murahhaslığı 82.42 (1 September 1923).
118. Lane, *Manners and Customs*, 284-85.
119. Ibid., 285.
120. エジプトで犬をペットとして飼う初期の事例は、それが外国



文化を受容したエリートによるものにはほぼ限られていたことを示している。例えば1840年代に、あるトルコ系の女性は後宮で、明らかにペットとして飼っていたバグ犬とともに目にされている。こうした伴侶関係を目撃したイギリス人は、すべてのムスリムが犬をののしるものと明らかに信じていたのだが、彼によればこの女性は、「小さなバグ犬を飼っており、拘束されずに部屋のなかをどこでも、通常の礼拝の場所として神聖と見なされていたイーワーンさえも走り回っていた。こうした少々の不潔さにもかかわらず、完全な自由が許されており、身体をすり寄せてはしょっちゅう主人の服を汚していた。彼女は何度か犬をなでさえもしており、ほえたりふざけたりするのを見て笑っていた。St. John, *Egypt and Nubia*, 239.

121. Lane, *Manners and Customs*, 286-87.
122. Ibid., 286. 意味ある家族的繋がりを持たないこの独身女性は、社会的には周縁のとされた。犬と、社会的に境界上に位置したり、抑圧された存在（独身者、路上生活者、犯罪者など）を関係づけるのは、文学や芸術、映画でよく見られるテーマである。McHugh, *Dog*, 157-70.
123. エジプトでは、犬に正式な埋葬を施す古代の先例がある。Reisner, “The Dog Which Was Honored by the King”; Tooley, “Coffin of a Dog from Beni Hasan.”
124. エジプトでは、死んだ犬に対する人間の哀悼と悲嘆についても古代の先例がある。紀元前5世紀にヘロドトスは、「誰の家であれ猫が自然死すれば、その家に住む者はみなまゆを剃るがそれだけである。死んだ動物が犬であれば、身体と頭をすべて剃る」と述べている。Herodotus, *The History*, 2.66.
125. 人間の理解における死と犬の関係についてより広くは、McHugh, *Dog*, 18, 39-48.
126. Lane, *Manners and Customs*, 286.
127. まさにオリエンタリストらしく、レインはこのことについて、性差別的な説明を付け加えている。「エジプトの女性にとって秘密を守ること、ましてこのような秘密を漏らさないことは不可能である」Ibid., 287.
128. 伴侶動物のために人間が行う記念行為と、それが人間と動物の感情的な関係について何を示すのかについて、Brandes, “The Meaning of American Pet Cemetery Gravestones”; Williams, “Ashes to Asses”; Chalfen, “Celebrating Life after Death”; Tague, “Dead Pets”; Chur-Hansen, “Cremation Services.”
129. この先例のいくつかに関しては、Mikhail, *Animal*, 75-77.
130. 都市の犬の糞便と排尿の問題については、Beck, *Ecology of Stray Dogs*, 53-59.
131. この点について、ソースティン・ヴェブレンはブルジョワの感性について1899年の古典的研究で以下のように書いている。「(犬は、) 家内動物のなかで容姿は最も汚らしく、習性は最も下品である。これを埋め合わせるべく、犬は、主人に対して卑屈でこびへつらう態度をとり、他のすべてに対しては進んで損害と不快感を加える。そして犬は、我々の支配欲に遊びを提供することで我々の好意を引き付けるのであり、金がかかり、(19世紀の資本主義では) 通例、何の産業目的にも役立たないながら、好評の対象として人間の評価では確かな地位を保っている。同時に犬は、我々の想像のなかでは追跡と結びつけられる。それは、称賛に値する使役であり、名誉ある捕食衝動の表現である」Veblen, *Theory of the Leisure Class*, 103.
132. 野良犬と関連した政治的、文明的懸念に関する考察について、McHugh, *Dog*, 127-45.

## 参考文献

- ‘Abd al-Karim, Ahmad ‘Izzat. *Tarikh al-Ta’lim fi ‘Asr Muhammad ‘Ali*. Cairo: Maktabat al-Nahda al-Misriyya, 1938.
- Abou El Fadl, Khaled. “Dogs in the Islamic Tradition and Nature.” *Encyclopedia of Religion and Nature*. London: Thoemmes Continuum, 2005.
- Abu-Lughod, Janet L. *Cairo: 1001 Years of the City Victorious*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1971.
- Alves, Abel A. *The Animals of Spain: An Introduction to Imperial Perceptions and Human Interaction with Other Animals, 1492-1826*. Leiden: Brill, 2011.
- Artan, Tülay. “A Book of Kings Produced and Presented as a Treatise on Hunting.” *Muqarnas* 25 (2008): 299-330.
- Beck, Alan M. *The Ecology of Stray Dogs: A Study of Free-Ranging Urban Animals*. West Lafayette, IN: NotaBell Books, 2002.
- Bousquet, G. H. “Des animaux et de leur traitement selon le judaïsme, le christianisme et l’islam.” *Studia Islamica* 9 (1958): 31-48.
- Brandes, Stanley. “The Meaning of American Pet Cemetery Gravestones.” *Ethnology* 48 (2009): 99-118.
- Buecker, Thomas R. “The Fort Robinson War Dog Reception and Training Center, 1942-46.” *Military History of the West* 38 (2008): 115-40.
- Caferoğlu, Ahmet. “Türk Onomastiginde ‘Köpek’ Kültü.” *Belleten* 25 (1961): 1-11.
- Chalfen, Richard. “Celebrating Life after Death: The Appearance of Snapshots in Japanese Pet Gravesites.” *Visual Studies* 18 (2003): 144-56.
- Chur-Hansen, Anna. “Cremation Services upon the Death of a Companion Animal: Views of Service Providers and Service Users.” *Society and Animals* 19 (2011): 248-60.
- Cole, Juan. *Napoleon’s Egypt: Invading the Middle East*. New York: Palgrave Macmillan, 2007.
- Al-Damardashi, Mustafa ibn al-Hajj Ibrahim tabi’ al-Marhum Hasan Agha ‘Azban. *Tarikh Waqayi’ Misr al-Qahira al-Mahrusa: Kinanat Allah fi Ardihi*, edited by Salah Ahmad Haridi ‘Ali. Cairo: Dar al-Kutub wa al-Watha’iq al-Qawmiyya, 2002.
- Al-Damurdashi Katkhuda ‘Azaban, Ahmad. *Al-Damurdashi’s Chronicle of Egypt, 1688-1755: al-Durra al-Musana fi Akhbar al-Kinana*. Translated by Daniel Crecelius and ‘Abd al-Wahhab Bakr. Leiden: Brill, 1991.
- . *Kitab al-Durra al-Musana fi Akhbar al-Kinana*. Edited by ‘Abd al-Rahim ‘Abd al-Rahman ‘Abd al-Rahim. Cairo: Institut français d’archéologie orientale, 1989.
- Dankoff, Robert. “Animal Traits in the Army Commander.” *Journal of Turkish Studies* 1 (1977): 95-112.
- Darnton, Robert. *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*. New York: Basic Books, 1999.
- Dean, Charles L. *Soldiers and Sled Dogs: A History of Military Dog Mushing*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2005.
- Downey, Fairfax Davis. *Dogs for Defense: American Dogs in the Second World War, 1941-45*. New York: Daniel P. McDonald, 1955.
- Ebied, R. Y., and M. J. L. Young. “An Unpublished Legal Work on a Difference between the Shāfi’ites and Mālikites.” *Orientalia Lovaniensia Periodica* 8 (1977): 251-62.
- Fahmy, Khaled. “For Cavafy, with Love and Squalor: Some

- Critical Notes on the History and Historiography of Modern Alexandria.” In *Alexandria, Real and Imagined*, edited by Anthony Hirst and Michael Silk, 263-80. Aldershot, UK: Ashgate, 2004.
- . “An Olfactory Tale of Two Cities: Cairo in the Nineteenth Century.” In *Historians in Cairo: Essays in Honor of George Scanlon*, edited by Jill Edwards, 155-87. Cairo: American University in Cairo Press, 2002.
- . “Towards a Social History of Modern Alexandria.” In *Alexandria, Real and Imagined*, edited by Anthony Hirst and Michael Silk, 281-306. Aldershot, UK: Ashgate, 2004.
- Fleming, George. *Travels on Horseback in Mantchu Tartary: Being a Summer's Ride beyond the Great Wall of China*. London: Hurst and Blackett, 1863.
- Foltz, Richard C. “Zoroastrian Attitudes toward Animals.” *Society and Animals* 18 (2010): 367-78.
- Forrest, S. K. Mendoza. *Witches, Whores, and Sorcerers: The Concept of Evil in Early Iran*. Austin: University of Texas Press, 2011.
- Fudge, Bruce. “Dog.” *Encyclopaedia of the Qur’ān*. Leiden: Brill Online, 2013.
- Fudge, Erica. *Pets*. Stocksfield: Acumen, 2008.
- Goldziher, Ignaz. “Islamisme et Parsisme.” *Revue de L'Histoire des Religions* 43 (1901): 1-29.
- Gonzales, Antonius. *Voyage en Égypte du Père Antonius Gonzales, 1665-1666*. 2 vols. Translated by Charles Libois. Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 1977.
- Goodavage, Maria. *Soldier Dogs: The Untold Story of America's Canine Heroes*. New York: Dutton, 2012.
- Grier, Katherine C. *Pets in America: A History*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2006.
- Hamilton, Alastair. *The Copts and the West, 1439-1822: The European Discovery of the Egyptian Church*. Oxford: Oxford University Press, 2006.
- Haraway, Donna J. *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2008.
- Harris, Gardiner. “A Bin Laden Hunter on Four Legs.” *New York Times*, May 4, 2011.
- Henniker, Frederick. *Notes during a Visit to Egypt, Nubia, the Oasis, Mount Sinai, and Jerusalem*. London: John Murray, 1823.
- Herodotus. *The History*. Translated by David Grene. Chicago: University of Chicago Press, 1987.
- Humes, Edward. *Garbology: Our Dirty Love Affair with Trash*. New York: Avery, 2012.
- Al-Jabarti, ‘Abd al-Rahman ibn Hasan. *‘Abd al-Rahman al-Jabarti's History of Egypt: ‘Aja’ib al-Athar fi al-Tarajim wa al-Akhbar*. 4 vols. Edited by Thomas Philipp and Moshe Perlmann. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1994.
- Joshi, Maheshwar P., and C. W. Brown. “Some Dynamics of Indo-Tibetan Trade through Uttarākhaṇḍa (Kumaon-Garhwal), India.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 30 (1987): 303-17.
- Kasaba, Reşat. *The Ottoman Empire and the World Economy: The Nineteenth Century*. Albany: State University of New York Press, 1988.
- Kete, Kathleen. *The Beast in the Boudoir: Petkeeping in Nineteenth-Century Paris*. Berkeley: University of California Press, 1994.
- Koslofsky, Craig. *Evening's Empire: A History of the Night in Early Modern Europe*. Cambridge: Cambridge University Press, 2011.
- Kuhnke, LaVerne. *Lives at Risk: Public Health in Nineteenth-Century Egypt*. Berkeley: University of California Press, 1990.
- Lane, Edward William. *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians: The Definitive 1860 Edition*. Cairo: American University in Cairo Press, 2003.
- . *Cairo Fifty Years Ago*. Edited by Stanley Lane-Poole. London: J. Murray, 1896.
- Lemish, Michael G. *War Dogs: Canines in Combat*. Washington, DC: Brassey's, 1996.
- Maghen, Ze'ev. “Dead Tradition: Joseph Schacht and the Origins of ‘Popular Practice.’” *Islamic Law and Society* 10 (2003): 276-347.
- Marsot, Afaf Lutfi al-Sayyid. *Egypt in the Reign of Muhammad Ali*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.
- McHugh, Susan. *Dog*. London: Reaktion Books, 2004.
- McNeur, Catherine. “The ‘Swinish Multitude’: Controversies over Hogs in Antebellum New York City.” *Journal of Urban History* 37 (2011): 639-60.
- Mikhail, Alan. *The Animal in Ottoman Egypt*. Oxford: Oxford University Press, 2014.
- . *Nature and Empire in Ottoman Egypt: An Environmental History*. Cambridge: Cambridge University Press, 2011.
- Mikhail, E. M., N. S. Mansour, and H. N. Awadalla. “Identification of *Trichinella* Isolates from Naturally Infected Stray Dogs in Egypt.” *Journal of Parasitology* 80 (1994): 151-54.
- Mitchell, Timothy. *Colonising Egypt*. Berkeley: University of California Press, 1991.
- Moazami, Mahnaz. “The Dog in Zoroastrian Religion: *Vidēvdād* Chapter XIII.” *Indo-Iranian Journal* 49 (2006): 127-49.
- . “Evil Animals in the Zoroastrian Religion.” *History of Religions* 44 (2005): 300-17.
- Morgan, James Morris. *Recollections of a Rebel Reefer*. Boston: Houghton Mifflin, 1917.
- Nash, Linda. *Inescapable Ecologies: A History of Environment, Disease, and Knowledge*. Berkeley: University of California Press, 2006.
- Palsetia, Jesse S. “Mad Dogs and Parsis: The Bombay Dog Riots of 1832.” *Journal of the Royal Asiatic Society* 11 (2001): 13-30.
- Panzac, Daniel. “Alexandrie: Évolution d'une ville cosmopolite au XIXe siècle.” In *Population et santé dans l'Empire ottoman (XVIIIe-XXe siècles)*, 141-59. Istanbul: Isis, 1996.
- Pearson, Susan J. *The Rights of the Defenseless: Protecting Animals and Children in Gilded Age America*. Chicago: University of Chicago Press, 2011.
- Pellat, Charles. *The Life and Works of Jāhīz, Translations of Selected Texts*. Translated by D. M. Hawke. Berkeley: University of California Press, 1969.
- Perlo, Katherine Wills. *Kinship and Killing: The Animal in World Religions*. New York: Columbia University Press, 2009.
- Pinguet, Catherine. “Istanbul's Street Dogs at the End of the Ottoman Empire: Protection or Extermination.” In *Animals and People in the Ottoman Empire*, edited by Suraiya Faroqhi, 353-71. Istanbul: Eren, 2010.
- Putney, William W. *Always Faithful: A Memoir of the Marine Dogs of WWII*. New York: Free Press, 2001.
- Al-Raf'i, ‘Abd al-Rahman. *‘Asr Muhammad ‘Ali*. Cairo: Dar al-

- Ma'arif, 1989.
- Ramzi, Muhammad. *Al-Qamus al-Jughrafi lil-Bilad al-Misriyya min 'Ahd Qudama' al-Misriyyin ila Sanat 1945*. 6 vols. in 2 pts. Cairo: al-Hay'a al-Misriyya al-'Amma lil-Kitab, 1994.
- Raymond, André. *Cairo: City of History*. Translated by Willard Wood. Cairo: American University in Cairo Press, 2001.
- . *Égyptiens et Français au Caire (1798-1801)*. Cairo: Institut français d'archéologie orientale, 2004.
- . "La population du Caire et de l'Égypte à l'époque ottomane et sous Muhammad 'Alī." In *Mémorial Ömer Lûtfi Barkan*, 169-78. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient Adrien Maisonneuve, 1980.
- Reisner, George A. "The Dog Which Was Honored by the King of Upper and Lower Egypt." *Bulletin of the Museum of Fine Arts* 34 (1936): 96-99.
- Ritvo, Harriet. "Pride and Pedigree: The Evolution of the Victorian Dog Fancy." *Victorian Studies* 29 (1986): 227-53.
- Sanders, Jeffrey C. "Animal Trouble and Urban Anxiety: Human-Animal Interaction in Post-Earth Day Seattle." *Environmental History* 16 (2011): 226-61.
- Schacht, Joseph. *The Origins of Muḥammadan Jurisprudence*. Oxford: Clarendon, 1950.
- Schafer, Edward H. "The Conservation of Nature under the T'ang Dynasty." *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 5 (1962): 279-308.
- Schick, İrvin Cemil. "Evliya Çelebi'den Köpeklere Dair." *Toplumsal Tarih* 202 (2010): 34-44.
- . "İstanbul'da 1910'da Gerçekleşen Büyük Köpek İtlâfı: Bir Mekan Üzerinde Çekişme Vakası." *Toplumsal Tarih* 200 (2010): 22-33.
- Schönig, Hanne. "Reflections on the Use of Animal Drugs in Yemen." *Quaderni di Studi Arabi* 20-21 (2002-3): 157-84.
- Seguin, Marilyn W. *Dogs of War: And Stories of Other Beasts of Battle in the Civil War*. Boston: Branden, 1998.
- Sertoğlu, Midhat. *Osmanlı Tarih Lügatı*. İstanbul: Enderun Kitabevi, 1986.
- Al-Shirbini, Yusuf ibn Muhammad. *Kitab Hazz al-Quhuf bi-Sharh Qasid Abi Shaduf*. Edited and translated by Humphrey Davies. 2 vols. Leuven: Peeters, 2005-7.
- Skabelund, Aaron. *Empire of Dogs: Canines, Japan, and the Making of the Modern Imperial World*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 2011.
- St. John, James Augustus. *Egypt and Mohammed Ali; or, Travels in the Valley of the Nile*. 2 vols. London: Longman, Rees, Orme, Brown, Green, and Longman, 1834.
- . *Egypt and Nubia*. London: Chapman and Hall, 1845.
- Tague, Ingrid H. "Dead Pets: Satire and Sentiment in British Elegies and Epitaphs for Animals." *Eighteenth-Century Studies* 41 (2008): 289-306.
- Thomas, Keith. *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England, 1500-1800*. London: Allen Lane, 1983.
- Tietze, Andreas. *Muṣṭafā 'Alī's Description of Cairo of 1599: Text, Transliteration, Translation, Notes*. Vienna: Verlag Der Österreichischen Akademie Der Wissenschaften, 1975.
- Tooley, Angela M. J. "Coffin of a Dog from Beni Hasan." *Journal of Egyptian Archaeology* 74 (1988): 207-11.
- Tropp, Jacob. "Dogs, Poison, and the Meaning of Colonial Intervention in the Transkei, South Africa." *Journal of African History* 43 (2002): 451-72.
- Tuan, Yi-Fu. *Dominance and Affection: The Making of Pets*. New Haven, CT: Yale University Press, 1984.
- Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class*. Boston: Houghton Mifflin, 1973.
- Veryard, Ellis. *An Account of Divers Choice Remarks . . . taken in a Journey through the Low-Countries, France, Italy, and Part of Spain; with the Isles of Sicily and Malta. As also, a Voyage to the Levant. . . .* Exon: Sam. Farley, 1701.
- Viré, François. "Kalb." *Encyclopaedia of Islam*. 2nd ed. Leiden: Brill Online, 2013.
- Walton, John K. "Mad Dogs and Englishmen: The Conflict over Rabies in Late Victorian England." *Journal of Social History* 13 (1979): 219-39.
- Williams, Howard. "Ashes to Asses: An Archaeological Perspective on Death and Donkeys." *Journal of Material Culture* 16 (2011): 219-39.